

令和 2 年 6 月 6 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13451

研究課題名（和文）意味を凝縮して伝達する効果的なレトリック表現の構文特性と概念化基盤

研究課題名（英文）Semantic and grammatical patterns of effective use of metonymic expressions

研究代表者

小松原 哲太 (Komatsubara, Tetsuta)

立命館大学・言語教育センター・嘱託講師

研究者番号：70779636

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、伝達内容を効率的に伝えるレトリックの成立に関与する諸要因を、換喩（メトニミー）の言語学的分析を通じて考察することである。日本語の文学テキストからレトリックの用例約2,500例を独自に収集し、意味論、文法論、認知言語学の観点から分析した。その結果、換喩は人間をとりまく、身体的、精神的、文化社会的フレームと密接に関わる表現手法であること、動詞の換喩にはアスペクトについて顕著な傾向があること、ひとまとまりの全体として認知しやすい概念が、換喩の媒体になる傾向があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

分析情報を付与したレトリックの用例データは、『日本語レトリックコーパス』のベータ版として、ウェブ上で公開した。このコーパスにより、機械的に収集することが難しいレトリックの用例に、誰でも容易にアクセスできるようになった。

また、具体的な換喩のタイプにしぼった事例分析の結果から、換喩の成立基盤には、談話文脈や文化的背景がかかわることが分かった。この知見から、レトリックの言語研究には、コミュニケーション学的視点や、言語人類学的視点を取り入れた学際的研究が必要であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study aims to investigate semantic and grammatical properties of metonymy, a basic linguistic strategy to express our thought effectively. With more than 2,500 examples of figurative language use collected from Japanese literary texts, we conducted cognitive linguistic analysis on lexical meanings and grammatical constructions. The results are described as follows: (i) lexical patterns of metonymy reflect physical, psychological, and socio-cultural knowledge around human activity; (ii) grammatical patterns of predicational metonymy (i.e., metonymy of verbs) are motivated by aspectual construal of events; (iii) concepts recognized as good Gestalts tend to be linguistically encoded in metonymic expressions.

研究分野：認知言語学

キーワード：換喩 メトニミー レトリック 修辞学 認知言語学 コーパス

## 1. 研究開始当初の背景

言語コミュニケーションでは、分かりやすく、かつ印象的に意味を伝達することが大切である。言わんとする意図の一部分だけに言及して、意味を凝縮して伝えるレトリックである「換喩」は、その重要な言語的手段である。

(例1) 「 - 偉いものを持ち出したぞ、カイゼルのわら人形を担いで来たんだ」(...) 大かっさいのうちに、人形はわっさ、わっさと辻の中央に運ばれた。「焼いちまえ！」「さっさとパリへ行っとくれ」「軍国主義を焼きすてろ！」(宮本百合子『伸子(上)』)

(例1) の下線部「軍国主義」は「カイゼルのわら人形」のことを言い換えている換喩であり、人形がもつさまざまな属性の中で、“軍国主義を掲げる人物がモデルである”という部分だけが言語化されることで、人形についての話者の見方が凝縮して表現されている。換喩の中心的機能は、意味を凝縮して印象的に伝えるということであり、この換喩の機能のメカニズムを解明することは、どのような要素を言語化し、どの要素を捨象することが、適切な意味伝達にとって効果的であるのかという、言語コミュニケーションの本質的な問題の一部を解決することにつながる。

レトリックとしての換喩の機能のメカニズムを解明するには、創造性の高い用例を具体的に観察、記述する必要がある。(例1) のような日本語の文学テキストでは、対面会話のような状況に頼った言語化ができない。したがって、語の意味を大きく変化させるためには、前後の言語的コンテキストを精密に調整しなければならない。逆の視点に立てば、テキストにおける換喩のコンテキストを詳しく分析すれば、どのような言語的条件下で換喩の効果が生まれるのかが分かるはずである。そこで本研究では、日本語の文学テキストから収集した換喩表現の概念的、構文的特徴を調べることで、換喩における効果的な意味伝達の基盤が明らかになると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究では、日本語の換喩表現と、換喩と共起する言語的コンテキストの性質を詳しく記述して、換喩の効果を生み出す構文(すなわち、形式と意味の対応関係)論的特性を解明することを目的とした。具体的には、以下の5点を研究の目的とした。

- (1) 「媒体」の意味タイプの記述：換喩の媒体を表す語句の意味的傾向を明らかにする。
- (2) 「趣意」の意味タイプの記述：換喩の趣意になりやすい概念のタイプがあるかを調べる。
- (3) 「近接性」のタイプの記述：換喩の効果を生み出す近接関係の認知的傾向を明らかにする。
- (4) 「鍵文脈」の文法分析：鍵文脈の語彙的、文法的特性を記述する。
- (5) 上記の分析にもとづき、換喩の効果を左右する概念的要因を特定する。

上記の目的に含まれている専門用語を、(例1) に即して説明する。換喩の「媒体」は軍国主義、「趣意」はカイゼルのわら人形にあたる。換喩の媒体は、それと「近接性」をもつ趣意を間接的に意味するという特徴をもつ。(例1) は、人形 > 人物 > 思想という概念の想起関係にもとづいた換喩である。「鍵文脈」となるのは「を焼きすてろ」という述部であり、この述部がトリガーとなって、媒体から趣意への転義が成立する。

## 3. 研究の方法

到達目標 <意味を凝縮する換喩の効果が生まれる構文的条件と概念的要因の解明>

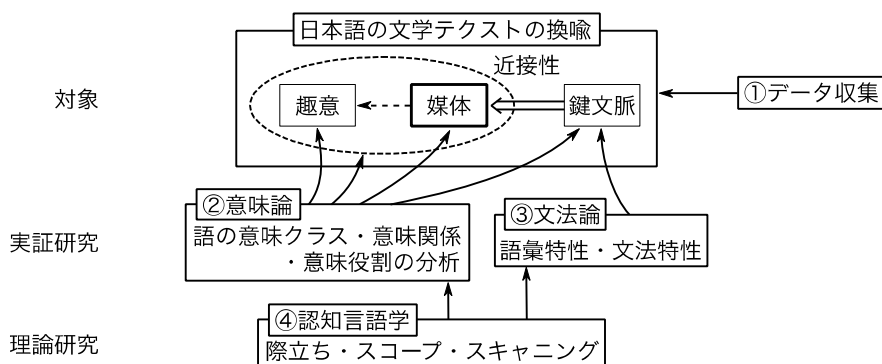


図1 研究方法の全体

意味論と文法論の観点から、換喩の構文的な言語使用環境を調査し、認知言語学を理論的背景として、意味を凝縮して伝達する効果の概念的要因を考察した。図 1 は、本研究の計画全体を示す。データ収集、意味論、文法論、認知言語学の 4 つの視点から、以下の手法を採用した。

#### (1) 手作業によるデータ収集

換喩は形式的には固定されていないレトリックの現象であるため、機械的に用例を収集することは難しい。そこで本研究では、レトリックなどの言語研究を行う京都大学の大学院生 6 名の協力者を得て、文学テキストを精査し手作業で用例の収集を行った。

#### (2) 意味論的視点からの分析

換喩の媒体と趣意の意味クラスの傾向を調べた。媒体と趣意の意味カテゴリーの分類基準として、日本語の語彙を意味的な基準で 49 の中項目と 500 の小項目に分類した『分類語彙表 - 増補改訂版データベース』を利用し、媒体と趣意を細かく意味カテゴリーに分類した。

#### (3) 文法論的視点からの分析

換喩表現と、その鍵文脈となる表現の語彙的特性と文法的特性を記述した。特に、動詞の換喩の意味解釈に影響するアスペクトに関しては、二次元フェーズ分析の理論 (Croft 2012) を採用し、詳しく分析した。

#### (4) 認知言語学を背景とした理論研究

語彙や文法の機能は、人間の概念化能力を反映したものであるという認知言語学のテーゼを理論的基盤として、換喩の効果を生み出す概念的要因を特定する。特に、換喩の媒体は際立ちの原則に従って選択されるという仮説 (Langacker 1993) を実証的に検証した。

## 4. 研究成果

### (1) データ収集に関する成果

研究の基盤になるデータ収集のために、『日本語レトリックコーパス』構築プロジェクト KOTORICA を立ち上げた。1 年目の研究期間内に、換喩類の用例約 480 例を含む合計 2,400 例以上のレトリックのデータを収集した。プロジェクトを通じて 16 回のミーティングを開き、クロスチェックを行うことで、記述の安定化を行った。本研究では換喩を主な分析対象としているが、このコーパスに含まれる他のレトリックと比較して換喩を分析することで、換喩のレトリックとしての特性を相対的に捉えることができる。このために、一貫性のある基準で、多種多様なレトリックの用例を分析することのできるフレームワークを構築した。作例に頼らない、実例だけを使った、ボトムアップな換喩の記述と分類を行う理論的枠組みの足がかりを得られたことは、大きな研究成果である。

2 年目には、同プロジェクトをさらに推し進め、収集したレトリックの用例をウェブ公開することを念頭において、コーパスの整備作業を行った。当初の研究計画では、収集したデータを、コーパスとして実装し、ウェブ公開することまでは想定していなかった。しかし、同プロジェクトにおいて協力者とのミーティングを重ねるうちに、コーパスの構築が、今後のレトリック研究を大きく推進するものであると考えるに至った。

3 年目には、同プロジェクトの成果として、『日本語レトリックコーパス』のベータ版をウェブ上で公開した。これにより、機械的に収集することが難しいレトリックの用例に、誰でも容易にアクセスできるようになった。このコーパスは、換喩をはじめとした、本研究で収集した多様なレトリックの用例約 2400 例 (約 20 万語規模、調査対象テキストの文字数約 94 万字) を収録しており、以下のような特徴をもつ。(ベータ版公開時点で、 の修辞技法のカテゴリー分類、の意味情報の付与は既に完了している。)

文学をはじめとするテキストから手作業で抽出されたレトリックの用例が収録されている。ページ数を特定した用例の出典が記載されているため、正確な引用が可能であり、資料の原本にあたることができる。

隠喩、換喩などの比喻表現に加え、広範囲の修辞技法のカテゴリーの用例を収録しており、修辞表現全般の記述を試みている。

『分類語彙表 - 増補改訂版データベース』をシソーラスとして、レトリックの意味クラスが体系的に記述されている。また、メタファー、メトニミー、コントラストをレトリックの主要な概念基盤と考え、意味のパターンを記述している。

レトリックの構文を構造と機能の面から分析することを試みている。

用例の具体的な理解にもとづく修辞的效果の注釈を試みている。

レトリックのコーパス構築は、国内でははじめての試みである。世界的に見ても、上記のように、用例に充実した情報付与がなされたレトリックのコーパスは他に類をみないものである。

## (2) 意味論に関する成果

『分類語彙表 - 増補改訂版データベース』をシソーラスとして利用し、同語彙表の分類番号を用いて、できるだけ用例の具体的な表現に即した意味記述を行った。例えば、(例 1) では、媒体となる「軍国主義」には 1.3075-14 (Group<心>、Section<説・論・主義>、Class<保守>) という分類番号、趣意となる「わら人形」には 1.4570-3 (Group<道具>、Section<遊具・置物・像など>、Class<蠟人形>) という分類番号が付与されることになる(ただし、(例 1) はコーパスの用例としては収録されていない)。Group、Section、Class はこの順に具体性が増していき、意味的な分類階層である。このシソーラスのアプローチには、分析者の言語感覚の揺れの影響を抑えることができるという利点に加え、『日本語レトリックコーパス』に、体系的な意味記述を付与した用例データを公開できるという利点もある。同コーパスで、この意味分析の成果は公開されている。

同コーパスに収録した換喩の用例と意味分析情報を利用して、日本語の換喩の意味的嗜好性を調査した。その結果、以下の傾向が明らかになった。この成果は、2019 年に関西学院大学で開催された The 15th International Cognitive Linguistic Conference で報告した。

談話の文脈において関連性が強い概念が言及される傾向がある。

身体概念によって精神概念を表す強い傾向がある。

“人を”描写する換喩、および“人に”言及する換喩が高い頻度で使用されており、人の概念化に関連する換喩が際立った生産性をもつ。

人の<身体部位><髪型><服飾品><所有物><居住地><行為><心情>などに言及することで人を描写するパターンがある。

服装や髪型に言及する換喩では、日本語圏の文化において、ステレオタイプ的なイメージを喚起する服装や髪型が選択される傾向がある。

人に言及することで<身体部位><生産物><心情>を描写するパターンが、生産的に用いられている。

以上の結果から示唆されることは、換喩は人間をとりまく、身体的、精神的、文化社会的フレームと密接に関わる表現手法であるということである。従来の研究では、換喩が知識フレームに関与することが指摘されてきた。本研究の知見からは、換喩のメカニズムの解明には、知識フレームのなかでも、特に、人間の活動や経験にかかわるフレームの分析と分類が必要となることが明らかになったと言える。

## (3) 文法論に関する成果

媒体が趣意を示すという、換喩の転義的理解が成立するには、鍵文脈の特徴が重要である。収集した換喩のデータは、媒体を名詞が表すものがほとんどであり、その場合、(例 1) の「を焼きすてる」のように、動詞を含む述部の文脈がトリガーとなって転義が起こることが多いことが分かった。ただし、アスペクト、モダリティ、発話行為などの、より詳しい述部の文法的特徴については、データの量的限界から、有意なパターンを抽出することはできなかった。

しかしながら、動詞の文法特徴を分析する過程で、名詞だけではなく、動詞にも換喩的転義が存在することが分かった。例えば「美容院に寄って、髪を切ってきた。」では、「切る」という動詞が表す切断行為を実質的に遂行したのは、話者ではなく、美容院のスタイリストであったと暗黙の内に理解される。このような動詞の換喩では、動詞の意味クラスだけではなく、動詞の文法的特性が影響していると考え、これを検証するために、日本語ウェブコーパス jaTenTen11 から約 300 例の動詞の換喩の用例を収集した。時制、アスペクト、モダリティの特性を記述した結果、以下のように、アスペクトについて顕著な傾向があることが分かった。

時間的に有界(初めと終わりがある)イベントが、動詞の換喩の媒体になる傾向がある。

質的に有界(開始状態と終了状態がある)イベントが、動詞の換喩の媒体になる傾向がある。

この研究は、換喩の鍵文脈の文法特徴を調べるという当初の計画からは逸れるものではあったが、以下の点で興味深い事実を明らかにしたと考える。アスペクトの点で有界なイベントが、換喩の媒体になる傾向があるということは、状態や活動のようなイベントよりも、典型的な他動的イベントの方が、換喩では言及されやすいことを意味する。言い換えると、ひとまとまりの閉じたまとまりとして認知されやすいイベントが、換喩の媒体になりやすいということである。これは、名詞の換喩と興味深い相同性を示す。上述したように、名詞の換喩でも、身体や人間のような、“良いゲシュタルト”となりやすい概念は、精神や感情のような、空間的に有界でない概念よりも媒体となりやすい。すなわち、動詞の換喩でも、名詞の換喩でも、全体として認知しやすい概念が、換喩の媒体になる傾向がある。

この研究で得られた知見は、2018 年に香港理工大学で開催された The Association for Researching and Applying Metaphor の学会で発表した後、成果を論文にまとめ、査読付き国際ジャーナル Cognitive Linguistic Studies (John Benjamins) から出版した。

#### (4) 認知言語学に関する成果

本研究では、認知言語学で提案されてきた換喩の動機づけに関する仮説を、収集したデータを用いて実証的に検証した。Langacker (1993) は、人間は人間以外の存在よりも際立ちが高い、といったような認知的な際立ちの原則が、換喩の媒体選択の動機づけになっていると主張した。これを受けて、Radden and Kövecses (1999) は、以下のような原則を提案した。(A OVER B は、A が B よりも換喩の媒体として選択されやすいことを表す。)

HUMAN OVER NON-HUMAN  
GOOD GESTALT OVER POOR GESTALT  
TYPICAL OVER NON-TYPICAL  
CLEAR OVER OBSCURE  
RELEVANT OVER IRRELEVANT, etc. (Radden and Kövecses 1999)

このような原則が、換喩の認知プロセスのなかではたらいっているという仮説は、現在広く認められているが、実証的な研究はなされてこなかった。上述した意味論的研究の成果は、この換喩の原則の有効性を検証する研究知見として解釈できる。人間が媒体となりやすいなど、結果は概してこれらの原則と整合性をもつものであり、仮説は概して支持されたといえる。ただし、人間が趣意となりやすいという点など、この原則では説明することができない傾向も明らかになった。本研究は、これらの原則の妥当性を示すと同時に、その適用限界の一端を示したといえる。

文法論的研究の成果は、この原則のなかでも、ゲシュタルトの原則、すなわち、まとまりをもった全体として認知されやすいものが換喩の媒体となるという原則が特別な地位を占めていることを示唆している。名詞の換喩では、空間と物体の認知に関する“良い”ゲシュタルトが媒体となりやすく、動詞の換喩では、時間と行為の認知に関する“良い”ゲシュタルトが媒体となりやすい。この名詞と動詞の換喩の並行性を説明する1つの仮説は、このゲシュタルトの原則が、空間から時間への隠喩(メタファー)によって写像されているというものである。この仮説を実証的に検証するにあたり、今後の研究でのより多くの換喩の用例収集と記述の蓄積が待たれる。

研究計画に対して、以上で述べた成果を要約する。データ収集と意味論的研究については、ほぼ研究計画に見合う成果が得られたといえる。特に、データ収集に関して、『日本語レトリックコーパス』の公開は、今後のレトリック研究のプラットフォームとなり得る重要な成果であり、当初の計画で想定していた以上の研究成果となった。文法論的研究に関しては、期待された精度での分析結果は得られなかった。しかし、動詞の換喩に関する成果は重要であり、意味論的研究の成果と合わせて、認知言語学の理論研究につながる意義深い知見を得ることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小松原哲太・田丸歩実	4. 巻 19
2. 論文標題 日本語における直喩の写像方略の類型	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 37～49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松原 哲太	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語の連体修飾からみた際立ちの社会性：社会的要因を取り入れた認知言語学のアプローチ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学会第41回大会大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 72～75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松原 哲太	4. 巻 3
2. 論文標題 修辭的效果を生み出すカテゴリー化：日本語における類の提喩の機能的多様性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 認知言語学研究	6. 最初と最後の頁 23～39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tetsuta Komatsubara	4. 巻 6
2. 論文標題 Cognitive principles underlying predicational metonymy	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Cognitive Linguistic Studies	6. 最初と最後の頁 247～270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/cogls.00040.kom	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 小松原哲太
2. 発表標題 知覚を鮮明化する 隠喩にはない直喩の機能について
3. 学会等名 日本語用論学会メタファー研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小松原哲太・田丸歩実
2. 発表標題 日本語における直喩の写像方略の種類
3. 学会等名 日本認知言語学会第19回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小松原哲太
2. 発表標題 比喩における文法の役割 直喩の指標から修辞性の構文へ
3. 学会等名 関西外国語大学言語フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tetsuta Komatsubara
2. 発表標題 Cognitive and cultural preferences of metonymy in Japanese
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小松原 哲太
2. 発表標題 凝縮された意味理解をもたらすカテゴリー化の文脈調整
3. 学会等名 認知科学研究センター研究会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tetsuta Komatsubara
2. 発表標題 The principles of salience and metonymy of verbs in Japanese
3. 学会等名 The 14th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小松原 哲太
2. 発表標題 日本語の連体修飾からみた際立ちの社会性：社会的要因を取り入れた認知言語学のアプローチ
3. 学会等名 社会言語科学会第41回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tetsuta Komatsubara
2. 発表標題 A metaphor behind metonymic preferences: An analysis of predicational metonymy in Japanese
3. 学会等名 RaAM 12 (国際学会)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 Tetsuta Komatsubara
2. 発表標題 Inferential simile: Constructions that prompt metonymic inference
3. 学会等名 UK Cognitive Linguistic Conference 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 早瀬 尚子、吉村 あき子、谷口 一美、小松原 哲太、井上 逸兵、多々良 直弘	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 330
3. 書名 言語の認知とコミュニケーション 意味論・語用論、認知言語学、社会言語学 . (「最新の認知文法研究の進展」PP. 167-214 担当)	

1. 著者名 加藤 重広、小松原 哲太、椎名 美智、柴崎 礼士郎、時本 真吾、野田 春美、藤本 真理子、吉川 正人	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 234
3. 書名 日本語語用論フォーラム2 (「比喩を導入する構文としての直喩の語用論的機能」PP. 47-73 担当)	

1. 著者名 森 雄一、西村 義樹、長谷川 明日 (編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 376
3. 書名 認知言語学を紡ぐ (「レトリックの認知構文論 効果的なくびき語法の成立基盤 」PP. 25-45担当)	

1. 著者名 池上 嘉彦、山梨 正明 (編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 420
3. 書名 認知言語学 (「メンタル・スペース理論」PP. 129-150担当)	

1. 著者名 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝 (編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 -
3. 書名 動的語用論の構築へ向けて第3巻 (「身体部位詞の換喩の修辭的效果 身体イメージのレトリック」担当)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

小松原哲太他 (編) (2019) 『日本語レトリックコーパス (The Corpus of Japanese Figurative Language; J-FIG)』 ベータ版. URI: <a href="https://www.kotorica.net/j-fig/">https://www.kotorica.net/j-fig/</a>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考